



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〜第三〇二号〜

小暑 しゅうしょ

七月七日

乳の宮

伊勢市の隣、玉城町には、伊勢神宮の摂社末社が多くあります。というのも、明治の神宮改革まで内宮の神官を代々務めてきた荒木田氏が開墾した土地だからです。

荒木田氏はのちに内宮近くへ居を移しても、一族の祖先をまつる祖先祭をするため、もともとの本拠地であった玉城町へ年に一度訪れていました。その場所が国東山のふもとの積良地区です。

先日、積良地区で「乳の宮」と呼ぶ場所へ案内してもらいました。ため池に面した森へ、獣除けの柵を開けて入ると、しめ縄が張られた場所がありました。祠もなく、楠の木が一本すつと立っています。あたりは静けさに包まれ、どこか神秘的に感じました。

乳の宮では、年に一度のお祭りをを行い、積良地区の人々はお参りするのが習わしです。その際に神前にお供えた米をもらい、炊いて食すと母乳の出がよくなるとの言われがあります。今もお米をもらっていく人が絶えないといえます。

『玉城町史』によると、ここは荒木田氏が一族の子孫繁栄と五穀豊穡を祖先に祈った山宮祭場跡で、のちに地元の人々が祠を建て、豊作と子孫繁栄を祈った場所。当初は「土の宮」であったのが、いつしか、ツチからチチに転訛して、乳の字を当て、母乳の宮と崇めるようになったとあります。

内宮の神官が祖先をまつった地を、今もお参りしていることに驚きました。信仰の深い山里です。

文 千種清美



おかげの里便り

おかげ横丁

○ みそか寄席

「みそか寄席」は、毎月末日の「みそか」に合わせて開いている落語会で、平成3年6月より28年間続いています。地元松阪出身の桂文我師匠を中心に、中堅・若手の噺家が多数出演しています。

7月は毎年恒例の林家正雀さんをお迎えして、今回は人情噺を披露していただきます。

と き／7月31日(水) 一部19:00～、二部21:30～

ところ／おかげ横丁「すし久」

木戸銭／前売券1,800円、当日券2,200円

一部

風呂敷

露の紫

ざこ八

桂文我

中村仲蔵

林家正雀

二部

延陽伯

露の紫

猿廻し

桂文我

火事息子

林家正雀

五十鈴塾

○ 漢字の旅「星・七・夕」

漢字はいつどのようにして生まれたのでしょうか。今、残っている一番古い漢字は甲骨文字。亀の甲羅や動物の骨に刻まれた漢字です。これは占いの結果を記録するために使われました。漢字は仮名やローマ字と違って一字一字が意味や由来をもっているのです。私たちが日頃使っている漢字にどんな意味があるのか、違った角度から見直してみると漢字の面白さ、楽しさが見えてきます。

今回、注目する漢字は金文「星・七・夕」。七夕は古代では女性だけの祝祭日です。甲骨文字「星・七・夕」の由来をさかのぼって、美しい七夕伝説とそれに関連する古代人の風俗習慣を紹介します。また、甲骨文字「星・七・夕」を絵的に書いてみましょう。

と き／7月9日(火) 13:30～15:00

講師／高潤生(書道篆刻家・現代印作家)

参加料／一般1,300円 会員800円

ところ／五十鈴塾右王舎

※お問い合わせ・お申込み 0596-20-8251

五十鈴茶屋

○ 節気菓子

みずぼたん
水牡丹

牡丹色に染めた梅の甘露煮を、葛寒天で包みました。水ぎわから、涼しい夕べの風が吹き込むかのようです。

ほおずき

暑さがつのと同時に、赤みを深める、ほおずき。外郎生地で黄味餡を包み、ほおずきの実に見立てました。

みす
御簾

緑に色付けした餡で粒餡を包み、琥珀羹で巻いたお菓子。目にも涼しく、夏の暮らしへの想いを表すひと品です。